
鉄鎖の王子

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄鎖の王子

【Nコード】

N2813C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

彼女を縛る、枷。それが彼。ショートショートです。10年後のバースデイなどを読んでからですと、いつそうお楽しみいただけます。

普段は決して考えないが、ふと思ってしまうことがある。

「もしも、出会わなかったなら」と。

それは本当にくだらないことだ。もう既に出会ってしまったって、その上離れられはしないと分かっている。

けれど、言わずにはいられない。

「もしも出会わなかったら」

そうだったとしたら、ふたり、今とはずっと違った道を歩いていただろう。今よりも幸せだったりさえするかもしれない。

ふとそう思うのは、裏切りなのかもしれない。

彼女なら笑って、「そんなことないですよ」と言うのだろう。

だけれど、彼女の笑顔を見るたびに辛くなる。彼女を苦しめているのは、自分という存在なのだ。

だから、今日も祈りを捧げる。

「彼女には、僕のような忌まわしい運命をお与えにならないでください」と。

すべてを統べる運命の三女神——その末妹の、未来の女神に。

風が舞っている。幾分伸び気味になっている髪を巻き上げて、散り散りに乱してしまう。

手で髪を押さえながら、切ってしまえばよかったかなと考えた。

まるで星のない夜空のようだ、と評する者さえいる髪を、実は彼はあまり気に入っていなかった。髪質のせいか、すぐに絡まって鳥の巣のようになってしまいうし、手入れを怠るとすぐ傷む。

ついでに言ってしまうえば、瞳を蒼き星のようだと形容されるのも

気に入らなかった。そんなふうに言われて喜ぶ男がどこに言うのだろうか？

そろそろ空気に冷たさが混じり始めていた。彼はわずかに身を震わせる。あまり肉付きがよいとは言えない身体に、冷たい空気は染み入ってくる。

ぽつぽつと明かりが灯り始めた家々や、帰っていく人々が小さく小さく見える。全てが箱庭で、自分はそれを組み立てている。そんな気がして、彼は笑った。

ふと肩が叩かれた。

叩いた相手をだいたいの見当をつけて振り向くと、犬のように人懐っこい笑顔に出くわした。

肩にかかる程度の蒼い髪、決して鋭さを失わない紅の瞳が印象的な青年だ。

飾り気のない神官衣が全くとっていいほど似合っていない。肌が白過ぎるせいだ。

「またこんなどこにいたのか、ラティール王子殿下」

「別にいいじゃない。僕はここが好きなんだからさ……シャナンにはわからないだろうけど」

蒼髪の青年――シャナンはあくびする。彼がこういう態度を取るときには、退屈しているのではなく、面白がっているのだとラティールは知っていた。わざと王子殿下などという呼び方をしている、さして敬意など払っていないのと同じように。

「リラーナが守ろうとした街が、一目で見渡せるんだから」

彼女の名を口にしただけで、胸が温かくなる。ラティールはシャナンから目をそらす。こんな顔を見られたら、また何を言われるかわからない。

「最近変だな、お前。何かあったか？」

問いかけに、ラティールは首を横に振る。口に出してみるまでもない。

何もなかったのだから。

何もないこと、そのものが問題なのだから……。

「――出会わなければよかったのに、って」

「誰と？」

「リラーナと」

夕日はわずかに地平線から顔を出しているのみで、あと一刻もしないうちに沈みきり、夜になってしまいうだろう。

「君は……どうしてぼくが彼女と出会ったんだと思う？」

「――俺とお前が親友だったからだろ」

わずかに間を置いてシャナンが答える。臆面もなく言っているように見えるが、その実かなり照れているのだ。ラテイルはそれくらいのこととは、とつくに把握していた。

「そうじゃないんだ。僕はね……鎖なんだよ」

窓の縁に腰掛けて、上体を低くしてシャナンの瞳をのぞき込む。

リラーナとシャナンは兄妹だというのに、あまり似ていない。それが、ラテイルがこの角度から見たときだけわずかに似ているような気がして、好きだった。

紅の瞳は感情を隠している。

「彼女を縛る鎖なんだ、僕は。リラーナという存在を、人の中に留めておくために、僕は彼女を縛りつける。僕自身が望むと望まざるとに関らずね」

皮肉な話だ。

ラテイルは心の中でつぶやく。

彼女の幸せを願えば願うほど――

彼女のそばにいたいのだと望めば望むほど――

傷つけてしまうことになる。

辛い思いをさせてしまうことになる。

ラテイルの想いは、重荷でしかないのだ、リラーナにとっては。それさえなければ、彼女はどこまでだって行けるのだ。はばたいて行くこともできるのだ……。

「もう定められていたんだよ、あらかじめ。神々によって仕組まれ

ていたんだ」

「神なんて——いやしないさ」

「……神官なのに、何てこと言うんだよ、全く。でもね、シャナン。これは本当のことなんだ。僕の存在が消える前に、新たな鎖が用意されるんだから」

「どうしてお前がそんなこと知ってるんだよ」

「分かるんだよ、そうとしか言いようがない。リラーナは人の心を持った魔だから、鎖は常になくてはならない。人の心は弱いから——彼女がいつ仲間の元へ向かうか分からない」

「ぱしん、と乾いた音がした。」

ラテイルははじめ、何が起こったのか分からなかった。やや間を置いてから、やっと、頬を張られたのだと気付く。先ほどの乾いた音は、シャナンの悲鳴のようだったな、と今更ながらにラテイルは思った。

じんわりと染み込んでくるような痛み、ラテイルは頬に手をやった。右の頬が熱を持っている。まるで頬そのものが独立した生き物のように、脈打っている。

「リラーナはお前のことを信じてるんだ」

シャナンの声は思いのほかしっかりしていた。細めの眉を吊り上げて、怒ったような顔をしている。けれどもラテイルには、シャナンが泣き出してしまいそうに見えた。

「こういうことを言うと自惚れに聞こえるかもしれないけど。だから、なんだよ。もしぼくがいなくなったら、彼女は抛り所を失ってしまう。ひとり異質なものとして、彼女はどうかやって生きればいいのか？」

ラテイルは立ちあがって、一歩シャナンに寄った。

「君はほとんど人間だ。だから、ずっとリラーナのそばについていてやれない。そうして、リラーナはただの女の子なんだ。本当だったら、年相応に服のことを考えたり、友達と遊んだり……そういうことをしているはずだったんだ」

シャナンの表情が歪んだ。端正な顔に翳りが生まれる。

ラティールは長く息を吐く。

「バカだな」

シャナンは額を押さえて言った。呆れているかのような口調だが、ラティールは彼がそういう風に言うのは、本当に馬鹿だと思っているときくらいだと知っている。

「……どうのこと？」

「さあな。お前が考えろよ。俺が教えた答えじゃダメなんだよ」

シャナンがつかつかと歩み寄ってきて、ラティールの頭をくしゃくしゃなでた。これで、風に乱されてとんでもないことになっていた。ラティールの髪が、さらにとんでもないことになった。

少し面白くなかったが、それも仕方ないことなのかなと、ラティールは思った。

シャナンは、ラティールとリラーナが出会うよりもずっと前から、彼女の鎖であったのだから――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2813c/>

鉄鎖の王子

2010年10月8日15時30分発行